

第6回常若講座 資料

今日の短歌 第十六代仁徳天皇

たか や のぼ み けぶり た

高き屋に登りて見れば煙立つ

たみ かまど にぎ

民の竈は賑わひにけり

仁徳天皇は第十五代・応神天皇の皇子。都を難波の高津宮に敷かれた。即位のはじめ、高い山から望む民家に竈の煙が立っていないのを一瞥になって民の貧窮をお知りになり、三年間の課役を免じて傷んだ宮殿の修復もお聞き入れにならなかった。三年を経て立ち昇る竈の煙に民の暮らしが豊かになった様を一瞥になり、はじめて宮殿の修復をお許しになった。

《伊勢神宮の式年遷宮》 別紙の冊子を参照

神宮と神宮大麻……

第六十三回神宮式年遷宮……

主なおまつりと行事……

【神生み 其の式】

……前回(第5回)のあらすじ……

《諸神等生坐の段・もろかみたちあれましのくだり》

国生みにより、日本の国土をお創りになった伊邪那岐命と伊邪那美命は、続いて神々をお生みになりました。(合計三十柱の神々)

《伊邪那美神 御石隠の段・いざなみのかみ みいわがくりのくだり》

引き続き神生みを続けられ天鳥船・大宜都比売神・火之夜芸速男神の三柱をお生みになり、続いて火之迦具土神をお生みになられたときに、ご自分の下腹部が焼けた為に亡くなられてしまいました。そのご遺体である吐瀉物・糞尿からも神々が生まれてきました。悲しみの中、伊邪那岐命は亡くなった伊邪那美命の横で腹這いになりながら泣き崩れ、その涙から泣沢女神がお生まれになり、そして伊邪那美命のご遺体を出雲の国と伯耆の国の境にある比婆之山に埋葬されました。

Ⅱ 迦具土神の被殺の段 Ⅱ

此処に伊邪那岐命、御佩かせる十拳劍を抜きて、其の子、迦具土神の頸を斬りたまう。爾に其の御刀の前に著ける血、湯津石村に走り就きて、成りませる神の名は、石拆神、次に根拆神、次に石筒之男神。(三神) 次に御刀の本に著ける血も、湯津石村に走り就きて、成りませる神の名は、甕速日神、次に樋速日神、次に建御雷之男神、亦の名は建布都神、亦の名は豊布都神。(三神) 次に御刀の手上に集まる血、手俣より漏き出て、成りませる神の名は、閻淤加美神、次に閻御津羽神。

上の件、石拆神より以下、閻御津羽神以前、併せて八神は、御刀に因りて成りませる神也。

殺さえましし迦具土神の頭に成りませる神の名は、正鹿山津見神。次に胸に成りませる神の名は、淤滕山津見神。次に腹に成りませる神の名は、奥山津見神。次に陰に成りませる神の名は、閻山津見神。左の手に成りませる神の名は、志芸山津見神。次に右の手に成りませる神の名は、羽山津見神、次に左の足に成りませる神の名は、原山津見神。次に右の足に成りませる神の名は、戸山津見神。(正鹿山津見神より、戸山津見神まで併せて八神) 故、斬りたまえる御刀の名は、天之尾羽張と謂う。亦の名は伊都之尾羽張と謂う。

次回、第7回常若講座(神生み 其の参)を令和八年四月下旬に開催します

◆愛する妻を亡くした伊邪那岐神は、その憎悪の念を迦具土神に向けて、十拳劍でその体を切り刻

んで殺してしまいましたが、その迦具土の遺体からも更なる神々がお生まれになりました。

◆そして伊邪那美命と永遠の別れをしようと思いましたが、黄泉國へ妻を吊うために訪れた伊邪那

岐命には新たなる試練が待ち受けているのです。伊邪那岐命の運命やいかに……